



## スペースラインユーザー INTERVIEW

CASE

01

医療法人清歯会 浅井歯科 京都市西京区



浅井 計征

浅井歯科医院(上桂)院長



浅井 拓

医療法人清歯会 理事長



浅井 勇吾

洛西口浅井歯科 院長

### スペースラインとともに 親子2代で洛西地域の歯科医療を 支え続けて45年

**計征院長** スペースラインとの最初の出会いは、1966(昭和41)年に大阪歯科大学を卒業後、河原町三条にあった歯科医院に勤務した時です。2年後、この上桂で浅井歯科を立ち上げましたが、開業当初はスペースライン2台でスタートしました。あの日から45年。今では両院で22台、院長として毎日元気に診療をできるのは、身体に優しくストレスの少ないスペースラインのおかげと感謝しています。

**拓理事長** 「子は親の背中を見て育つ」とはよく言ったものです。私も幼い頃から父が治療する姿を毎日当たり前のように目にしながら「歯医者はこのものなんだ、こんなふうの治療するものなんだ」、そんなふうになんか感じていました。

**勇吾院長** 私の場合は、父と兄という「大先輩」がいましたか



1968(昭和43)年、上桂で浅井歯科が開業(写真は開業当時の外観)。



スペースライン2台から浅井歯科の歴史の扉が開かれた(写真は昭和53年、改装後の診療室)。



左から拓理事長、計征院長、勇吾院長。今まで30人の歯科医師が浅井歯科を巣立っていったが、そのほとんどが引き続きスペースラインを愛用しておられる。

ら・・・(笑)。スペースラインは、母校の在学中に使い慣れていましたので、水平位診療を特に意識したことはなかったですね。

**計征院長** 開業当時は、京都でもそれほど多くの先生が使っていた状況ではなかったと記憶していますが、息子たちが通う大学では学生たちは日常的に接していましたから、拓も勇吾もスペースラインに対しては、ごく自然に向き合えたのだと思います。

**拓理事長** やはり慣れが大きな経験につながるのでしょうか。私は他のユニットもいろいろ使ってみました。結局慣れ親しんだスペースラインに戻ってきました。まずコンパクトで設置にもスペースをとらない。そして使い勝手がいいんですね。あと不具合があったらモリタの営業マンやサービスマンがすぐ駆け



開業45周年の節目を迎えた「歯科の総合病院」の老舗、浅井歯科医院(上桂)。永年におよぶ地域歯科医療への貢献度は多大だ。



洛西口浅井歯科。阪急・洛西口前にオープンして9年。拓理事長と勇吾院長の兄弟タッグで日々の診療にあたっている。



浅井歯科医院(上桂)のメンバー。高度なチーム医療を支えているエキスパートたちの笑顔は心強い。



洛西口浅井歯科のメンバー。明るさも若々しさも健やかさも、スタッフひとり一人の情熱と努力が創造するもの。

つけてくれることも大きなメリットでしょう。

**勇吾院長** なぜスペースラインなのか?それを一言で話すのは簡単ではありません。ただ、どの患者さんもそれぞれのストレスを胸に抱いて来院されます。そんな患者さんの心情をよく理解し、親身になってお応えすることが大切でしょう。浅井歯科では、特に患者さんを優しくおもてなしするという気ばりを徹底していますが、スペースラインのデザインの優しさや機能のシンプルさ、その細やかな心づかいが、患者さんの緊張した気持ちをさりげなく和らげることに役立っているのではないのでしょうか。

**拓理事長** 水平位診療のメリットは、インスツルメントのピックアップやリターンが自然でスムーズに行えて、指先への負担が少ない点でしょう。しかも、診療姿勢にムリがないので、長時間でも疲れにくいですね。臨床家が長く現役のまま診療を続けるための環境を与えてくれている診療スタイル、それが水平位診療だと思っています。



上桂では設置から23年経た今も3台のスペースライン"525"が現役で活躍中。

**計征院長** 二人がタッグを組みながら、スタッフともども切磋琢磨し合い、支え合っていることも前進すること、浅井歯科が

地域医療にもっと貢献できること、患者さんの一生の健康づくりを応援すること…、それが私の終生の願いなのです。それだけに、スペースラインのシンプルなデザインに患者さんが好印象を持ってくださったり、クリニックへの信頼感が深まったりしているのは、とてもありがたいことです。

**拓理事長** 浅井歯科では、なによりもまずこの西京地域の皆さんが健康で幸せな生活を送っていただくことを最優先に、大学病院の診療レベルに引けを取らない技術・知識・ノウハウを結集した「歯科の総合病院」をめざしてきました。比較的近い場所に分院をおいたのもそのためです。

これからも、父が築いてきた「地域密着」という不動のポリシーを勇吾院長と二人でさらに発展させていくことが、私たち兄弟の使命でしょう。

**勇吾院長** 本院・分院間でビジョンやクリニカル情報を共有できることが2院体制の大きなメリットですね。創意工夫を重ねながら、日々改善し、イノベーションできる診療環境に身を置いて、能力や経験を発揮できるのは幸せですし、大きな達成感を感じて診療に専念できることは素晴らしい体験です。

**計征院長** 45年の間、一步一步、歯科医師として、父として、まさにスペースラインとともに歩んできたといっても過言ではありません。これからも倦まず弛まず、親から子へ、子から孫へとこのバトンをつないでいきたいですね。



## スペースラインユーザー INTERVIEW



### CASE 02 江崎 久美子 院長

ア歯科江崎診療所 東京都世田谷区

## ネットワーク時代を見通した先験的な開発思想とデザイン 深いビジョンと高いミッション Dr.ビーチに気づかされた人間愛と診療スタイル

1974年春に神奈川歯科大学を卒業した時、ホームドクターをめざすためには、総合的な診断力を身につけなければ!と痛感して、口腔診断学教室に入局しました。Dr.ビーチが創設されたHPI研究所のセミナーを受講していた先輩に誘われて、Dr.ビーチもスペースラインも知らないまま熱海へ向かったのです。研究所の診療室に一步入るや否や、目を疑いました。当時大学では立位実習でしたから、座位でテーブルユニットを使うスタイルは、まさに青天の霹靂。でも次の瞬間、「これだワ!」とインスピレーションが走りました。10日間コースの講習費は高額でしたが、見学したい一心で何度も熱海に足を運びました。2年目は親に講習費の半分の借入し、大学を退職。晴れて正式に受講生のお墨付きをいただけたのです。

その後、セミナーで学んだスキルを実践するチャンスに恵まれず悩んでいたところ、今のビルのオーナーから、桜新町駅の開業と同時に駅の上にビルを建てるので…と、当時卒業して2年目の私にとって望外だった開業話がすぐにまとまり1977年7月に診療所を開設できたのは、実にラッキーの一言でした。それから36年。チェアがHPOからフィール21にチェンジしたものの、院内を一度もリフォームしていないのは驚きです。まさに「Dr.No Change」の異名を馳せるDr.ビーチならではの奇跡! 最も理想的な診療環境・OMU (Optimum Management Unit) のコンセプトの妙とデザインの真価ではないでしょうか。

私にとって、一にも二にもスペースラインだった理由。それは



シンプル・イズ・ベスト。患者さんの健康をしっかりと支えてきた水平位診療への信頼と敬愛は揺るがない。



江崎院長をやさしく包む優美なスタッフたちの力強いアシスト。以心伝心のチーム医療が診療のクオリティを高めている。



Dr.ビーチに授かった人間愛と診療フォームは、江崎院長の生涯を支える確たる信念となった。

チェアマウントユニットでは、坐骨点によって治療ポイントが変わるので、その位置に合わせて身体のポジションも変えなければなりません。ベットのユニットは患者さんの身長に関係なく、一定のポジションで診療できる柔軟さがある点に尽きます。つまり、身体を機器類に合わせるのではなく、自然で滑らかな姿勢と動きのまま治療に専念できるからです。今では常識ですが、手を洗うキャビネットがすぐ後ろにあり、器材類を分類して収納できる安心感に守られていたことも、アシスタントと以心伝心で4ハンドの連携がスムーズにできたことも新鮮でした。変わらない、変えてはならない普遍性。シンプル・イズ・ベスト。このスタイルなら一生涯、続けられる!という確信を抱かせる高い論理性と強い説得力。それが、水平位診療に満ち満ちていたからに違いありません。



## CASE 03 大坪 誠 院長

大坪歯科医院 鹿児島県鹿児島市

### 変わらない診療システムの普遍性 変えるべき診療スタイルに気づかされた スペースラインとの鮮烈な出会い

私は鹿児島県川辺の生まれですが、祖父が診療放射線技師、母が看護師の家庭に育ったこともあり、成長するにつれて、少しずつ医療の仕事に就きたいと思うようになりました。

日本大学松戸歯学部を卒業後、横浜市内の歯科医院で勤務、帰郷後は、鹿児島市内に勤務、経験豊富で誠実な先生方のご指導を受けながら、ひたすら臨床に専念することができました。この鹿児島での修業時代に巡り会ったのがスペースラインとpdスタイルでの水平位診療です。

初めは診療姿勢も自己流で、ただ直感的にスペースラインが「使いやすい」という感想だけでしたが、偶然モリタスタッフの方々と雑談の中で、その「使いやすさ」の裏にあった、理論やpdスタイルの存在を教えていただき、とても驚いたのを覚えています。より良い診療成果を得るために自己流の診療姿勢を変えなければ、と実感しました。

私はスポーツ等で身体を動かすのが好きですが、スポーツでもより良い結果を出すために、フォームや認識の修正・改善をすることが多く出てくると思います。臨床も同じで、できるだけ場数を踏みつつ、間違いや弱点に早く気付いて修正・改善し、またチャレンジしていく。そのやる気と行動力が要だと感じています。

去年は大阪、今年は福岡でのセミナーを受けてからは、私の確信はさらに深まり、スペースライン イムシア タイプⅢUPを3



患者さんの一生を見守り続けたい。質実剛健の薩摩隼人・大坪院長の胸に燃える切なる願いは、水平位診療の実践によって日々かなえられている。



横浜の修業時代に結ばれた、佳奈子歯科衛生士(左)との巡り会い。大坪院長にとっては、チーム医療を推進するためのベスト・パートナーだ。



大坪院長の診療スタイルを一変させた水平位診療との出会い。「背筋を伸ばす姿勢は、症例に誠実に向き合う姿勢そのものですね」。

台設置して、4月の開業に備えました。

開業してまだ日が浅いですが、私の気づきや体験を同僚や後輩に伝えていければと考えています。

腰痛や手足の疲労で悩んでいる先生や、マイクロスコープを使いたい先生にもアドバイスできればとも考えています。

水平位診療に少しでも興味があるなら、東京や大阪などで開かれているpdセミナーに一度参加してみられてはいかがでしょうか？ たった1回のセミナーが、先生の未来を変えるかもしれません。私の場合、かなりのインパクトを実感し、新しい診療の道が見えてきました。ぜひ、前向きにチャレンジしてみてください。

pdスタイルに出会う。これが未来を切り拓くキーワードではないでしょうか。